

教職大学院 Newsletter

No.193

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2025.4.11(公開版)

加速する社会と公教育の変革を牽引する 新たな教職へのトランスフォーメーション

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科
研究科長・教授 木村 優

2024年度から2025年度へ、年を追うごとに私たちの暮らす社会・世界はますます変化を加速させています。

私が先日、訪問したアメリカのカリフォルニア州サンフランシスコでは、まだ日本では実証実験段階にある自動運転タクシーが実用化されていました。Waymoという開発企業名を冠したその無人タクシーは、サンフランシスコではすでに街中を縦横無尽に行き来しています。四方八方に付けられたカメラ、そしてGPSでキャッチした周辺情報を人工知能で分析し、巧みなハンドルさばきを行うWaymoは、見事に障害物をかわし、交通ルールを守って、私たちを目的地へと快適に、そして安全に運んでくれました。

この自動運転タクシーの実用化は一例に過ぎません。私たちの周りではいつもたくさんの大小のイノベーションが起きていて、日々、新しい製品、システムが創造されています。そして、そうした新しい製品やシステムが私たちの新しい暮らしやかかわりや文化を創造しているのです。

ただし、こうしたイノベーションは常により良い創造に結びつくとは限りません。私たち人間が起こすイノベーションは時に「創造的破壊」をもたら

すものです。例えば、イノベーションがもたらす富は莫大です。そのため、富の再分配が不均衡になってくることで社会格差が助長されていきます。

Waymoが行き来するサンフランシスコでは、観光名所である、急なくねくね坂道のロンバート・ストリートに高級住宅街と高級自動車が立ち並んでいました。その一方で、同じサンフランシスコのテンドーロイン地区では、貧困や見通しの暗い将来への極度の不安から合成オピオイド・フェンタニルに手を出し、致死の中毒に苦しむ人々が救済を待っていました。

光と闇の両方を抱えながら加速する社会の中で、公教育もまた変革を迫られることになります。私たちはこれからどのような公教育を実現していけばいいのか、いやもっと具体的に、私たちは子どもたちにどのような学びと育ちを保障していけばいいのか、加速する社会に適応できるように学校をいか

内容

巻頭言	(1)
学位記伝達式修了生代表挨拶	(3)
教職大学院を振り返って(修了生の言葉)	(5)
修了生に贈る言葉	(14)
退任にあたって	(21)
令和7年度年間計画	(27)

に変革していけばいいのか、そして私たち教職はどのような専門職にトランスフォームしていけばいいのか、加速する社会で暮らしているからこそ私たちは「速く」、こうした問いへの回答を示し、行動に移していく必要に迫られているとも言えます。

ちょうどこのニュースレター記事のタイトルに似た論文「公教育の変革を牽引する教師の専門性開発のビジョン：省察的・協働的・協創的専門職としての教師の定位」（木村, 2024）を昨年末に『教育学研究』という学術誌で発表させていただきました。この論文は、専門職としての教師をめぐる現代の言説とそれに連動する日本の教師政策の歴史的展開を分析し、公教育を変革する教師の専門性開発を支えるビジョンを探究するものです。この探究で見出されたのは、時代や社会の変化がもたらす教育刷新の要求に時に翻弄されながらも柔軟に対応し、確かな専門知・スキルを有しながらもそれらを思慮深い判断にもとづき実行し、そうした一連の実践を同僚と共に省察することで鍛え合い、さらに同僚だけで

なく保護者、地域の人々、他の専門職といった多様なステークホルダー、そして誰よりも子どもたちと共に新しい価値を協創する新たな教職の姿でした。

教職の専門性を教師個人の力量や資質という人的資本のみで定義してきた時代から、教師協働と省察的实践という社会関係資本と意思決定資本を加えて再定義しつつあった 1990 年代、イギリスの教育学者デイヴィッド・ハーグリーブスはそうした教職の変貌を「新しい専門職 New Professionals」の到来として論じました。そして私たちは今、加速する社会の中でさらなる教職の変貌期に生きています。

さあ、今こそ私たちが共に手を携えて「真新しい専門職 Brand-New Professionals」にトランスフォームする時が来たのです。より良い学び、より良い学校、より良い社会、より良い世界を創発するために、学び育ち合い、協創していきましょう。



学位記伝達式修了生代表挨拶



長期実践研究報告を書いていた頃には、あんなにも降り積もっていた雪は、ほとんど解け、暖かい春の陽気の中、恵みの雨が降る季節となりました。このよき日に、共に学んだ同僚たちと卒業できることを大変嬉しく思います。

さて、皆さんにとって、教職大学院で学んだ日々は、どんな価値のあるものでしたか。

私は、この2年間を評価する時、「なにも達成することができなかった」と考えてしまいます。2年間あれだけ頑張ったのに、あれだけもがき苦しんだのに、ただの1つも達成することができなかったと、そう思うのです。

そう考える理由は、教職大学院に入学した目的を、未だ何一つ達成できていないからだと考えています。私は、「人の役に立ちたい」という人生目標から、「生徒の役に立つ教師になる」ために、授業力の向上などを目的に、教職大学院に入学しました。

しかし、授業力が向上したかと問われれば、まだ生徒のストーリーではなく、教師のストーリーに沿った授業しか作ることができません。生徒の見取りも、話の聞き方も、まだまるで不十分で、生徒どころか同僚の院生との意思疎通すら十分に行うことができませんでした。

今の私は、入学当時の私が思い描いていた「生徒の役に立つ教師」とは程遠い状態です。だからこそ私は、この2年間に対して「何一つ達成することができなかった」と評価するのです。

それでも私は、この2年間の歩みを後悔していません。

例えば、生徒のストーリーに沿った授業を作ることとは、まだできていませんが、分かりやすい授業よりも、生徒が自分で考える授業を作ることができる教

師の方が「生徒の役に立つ教師」に近いのではないかと、気づき始めることができました。

時間の都合でこれ以上の具体例は割愛しますが、目的が達成されない中でも、私はたくさんの学びや気づきを得て、自分自身を捉え直すことができました。

入学当初の課題意識に基づいて、日々の実践を積み重ねてきたからこそ、入学当初の目的が達成できなかった、日々の実践に価値がなかったように感じてしまいがちです。しかし、私のこの2年間の歩みの価値は、歩みを振り返った時に初めて見えてくるものでした。

私は、「生徒の役に立つ教師」になるべく、実践を積み重ねてきましたが、私が2年間の歩みで、何度も場面を変え、相手を変え、ずっと向き合い続けてきた問いは「生徒の役に立つとはどういうことか」という問いでした。

この問いは、場面によって、相手によって最適解が変わる問いであり、考え続けることにこそ価値がある問いであると考えています。この問いの答えが出ていないことは、この2年間の歩みに価値がなかったことを示すものではありません。

だからこそ私は、この2年間を評価する時には、「何一つ達成することができなかったけれど、確かに得られたものはあった日々だった」と胸を張って言うことができます。

ただし、歩みを振り返った時に、自らの歩みの価値を見つけるためには、1つだけ欠かせないことがあると考えています。それは、この2年間の日々とひたむきに向き合い続けることです。私たちは教師生活において、授業や生徒、同僚をはじめ、様々なものと向き合います。それらと、ひたむきに、真剣に、全力で向き合うと、それらには自分の価値観が鏡のよ

うに映ります。そこに映る自分と向き合い、自分を捉え直し、世界を捉え直しながら、学び続けた歩みがあるからこそ、私は自らの歩みの価値を見つけることができました。

私はこれからも、授業や生徒、同僚、そして自分自身といった様々なものとひたむきに向き合い続けていこうと思います。時には投げ出すことや、逃げ出すこともあるかもしれませんが、それでも、向き合うことから逃げず、そんな自分と、そうせざるを得なかった環境と向き合っていこうと思います。

最後に、私の好きな曲の一節を紹介させていただきます。これは、cosMo@暴走Pが初音ミク12周年に合わせて投稿した『浅黄色のマイルストーン』という曲の一節です。

歩き続けた意味を問う

考え続けた時を振り返る

思考めぐらせ予測する

それでもわからない「未来」目の前に

ならば希望をもってもいいんじゃないかな

私はこれからも、歩んだ意味を問い続け、考えた日々を振り返り、これから起こることを予測するために、思考し続けていきます。答えがわからない日々を不安に思うこともありますが、答えがないからこそ、自分なりの正解を求めることができる日々、希望をもって歩んでいこうと思います。

最後になりましたが、皆さんにとって、これからの歩みが、学び多きものであることを願って、挨拶と、させていただきます。

令和7年3月24日

院生代表 黒瀬玲凱



教職大学院を振り返って(修了生の言葉)



教職大学院での学び

授業研究・教職専門性開発コース 2024 年度修了生

劉 靖宇

学部時代は、コロナ禍の影響であまり人と話す機会がなかった。ゼミは1週間に1回話す機会になっていたが、ゼミ生の卒論テーマもバラバラなので、人と話す必要性や共有する意味について考えていた。

しかし、教職大学院の2年間はたくさんの先生方や院生と話すことができた。様々な視点や価値観を受け入れ、自分が持っている視点や価値観と重ねることで、教育観や授業観が変わっていった。

カンファレンスの中で、先生方の経験や院生の悩みを一緒に考えることで、知らないうちに自分の知識になっていった。それは、学部時代に考えていた対話の必要性や共有の意味について改めて再考することにつながった。

また、校種や職種が違う方とのたくさんの出会いの中で、どんな子どもを育てたいのか、そのためにどんな力を育成すべきのか、という点について、自分の考えと他者の多くの考えを重ねることで、視野が広がり思考を深めることができたと感じている。

この2年間、お世話になりました。「対話的な学び」「協働的な学び」は自身をより成長させることができたし、多様な視点や価値観を受け入れることができるようになったのは教職大学院で出会ったすべての方から学んだことであると思う。感謝の言葉だけで済まないと思うが、これから学んだことをもと実践の中で活かし、さらに深めることで自身を成長させていこうと考えている。

浅黄色のマイルストーン

授業研究・教職専門性開発コース 2024 年度修了生

黒瀬 玲凱

このタイトルは、私の好きな cosMo@暴走Pが初音ミク12周年に合わせて投稿した楽曲である。この曲のサビの歌詞が私は非常に好きで、ここで紹介させていただこうと思う。

歩き続けた意味を問う
考え続けた時間を振り返る
思考巡らせ予測する

それでもわからない「未来」眼の前に
ならば希望をもってもいいんじゃないかな

私の大学院での2年間はまさにこの歌詞に表されるようなものであった。インターンで学び、その意味を問い、大学院で学び、その意味を問う。ひたすらに考え、その考えたことをさらに振り返る。その問いかけ、考えたことをもとに、新たな作業仮説を立て、そ

れを実行してみる。しかし、結果として予想通りにはいかない未来が押し寄せてくる。そしてまた歩き続けた意味を問い直す。休む間もない、あるいは休む間を自分で削りに削った2年間であった。

2年間歩き続けている時の私はわからない未来を眼の前にして、希望を持たずにいた。「こんなに苦労だけして、何も得られないのであれば、大学院なんかに来ずに現場に出ていた方が学べたことが多かったのではないか」などということを先輩に吐露したこともある。

しかし、長期実践研究報告を書き記していく中で、私が2年間歩き続け、考え続けたことの価値にやっと気づくことができた。ここで改めて、私が24年間歩き続けた意味を問おう。

私はずっと歩き続ける中で「目の前の相手の役に立つ」「目の前の相手のやりたいことを叶える」という目的を達成できず、歩き続ける意味を見出すことができなかった。長期実践研究報告を記していく中で、私は目的を達成すること自体はできていなかったが、その目的に対する捉えが少しずつ変わってきていることに気づくことができた。

私が2年間歩き続けた意味は、私自身の世界の捉え、あるいは世界への求めの変容であった。

かつて私は認められたいから、あるいは嫌われないから人の役に立ちたい人間であった。しかし今の私は、相手の自己実現に資するために役に立ちたい人間に変容したことを自覚した。嫌われないから人との関わりを避けるように生きてきたが、認められ、役に立つためには関係構築を避けては通れないことを自覚した。自分にはやりたいことがないから相手のやりたいことを叶えようとしていたが、

「相手のやりたいことを叶える」は相手の自己実現に資することであり、本当に私のやりたいことへと変化していたことに気づくことができた。

歩き続けた意味を問い、考え続けた時間を振り返ったことで得られたものを踏まえて、私はこれから教員としてどのようなことを成していくのか、思考を巡らせて予測してみる。

よい集団を作っていくには、各々がその集団をどのように捉え、何を求めているのかを自覚し、共有する必要がある。だからこそ、私は自分自身の学校や学級への求めを自覚し、長期実践研究報告において明文化した。しかし、これから会う生徒や同僚がどのような求めを持っているのかはわからない。私自身の求めもこれから変容していくことだろう。そういった違う考えを持つ人とどのように合意形成を図ればいいのかはまだ私にはつかめていない。どれだけ予想をしてもわからない未来が眼の前にある。

しかし、今の私は希望を持っている。私は臆病で狭い世界に閉じこもる人間であったが、これまでの人生で私が怯えていたことのほとんどが杞憂であった。ただ私が逃げていたことを自覚した。私は、わからないから逃げる必要などなく、わからないからこそ、みんなと作り上げていけばよいと考え始めた。それがどんな展開になるかはわからないが、この2年間の努力が私を後押ししている。歩き続けた意味を問い、考え続けた時間を振り返ったことで、私は分からない「未来」に対して希望を持ってもいいんじゃないかなと思えるようになった。

これから教職大学院の学びを歩む皆さんにとって、この省察的实践の日々が新たな希望へとつながることを願って、私の2年間の学びを結ぼうと思う。

修了生の言葉

ミドルリーダー養成コース 2024 年度修了生

高橋 美幡

長いようであつという間の 2 年間であつた。しかし終わったという感覚はなく、これからまたどのように展開していくべきか、そればかりを考えている。

私が教職大学院に入学した動機は、司書教諭という立場として「図書館と生徒、図書館と先生をいかに繋ぐか」というテーマの答えを模索することであつた。そのため、入学前は「どのような手法を学べるか」という期待があつた。しかし、2 年間を終えて分かったことは「そんな手法などない」ということである。結局は一人ひとりと向き合い、その時・その瞬間のニーズを察知すること、寄り添うことしかできないのである。ドキュメンタリー映画「ニューヨーク公共図書館」の中で印象的だった言葉に「図書館は本の置き場ではない。図書館とは人である」というものがあるが、この言葉が全てを物語っているように思う。図書館は人であり、学校もまた人である。そして私はこの「人」が見えていなかったのだと 2 年間の学びの中で思い知らされた。

いま一番悩まされているのは総合的な学習の時間・探究の時間である。本校の総合は各学年でテーマがあり、その中から個人、またはグループで問いをたてていく。高校 1 年生は社会課題解決に向けてグループでプロジェクトを実行することがミッションとなっているが、プロジェクトありきでテーマを決めるグループや、調べ学習にとどまるグループなど、教師側の狙いとは程遠い現状がある。私はなるべく生徒のやりたいようにやらせたいと思いつつも、どうしても最終的な成果物の見通しが立てられるように生徒を誘導してしまう。

大学院のグループセッションで授業外での生徒との関わりを述べた際、生徒に寄り添った実践だと価値を見出してくださったことがある。自分の中では特別なエピソードとは思っていなかったが、そこが

大切だったということに気付かされた。しかしそれが授業となると途端にできなくなる。探究は成果物のできではなく、その過程が大事であると分かっているつもりではあるが、実際はそれができない。

生徒には図書館を活用して欲しいが、それは総合の時間の目的ではない。しかしマストではないにせよ、活用すればよりよい探究的な活動になる可能性はある。図書館といえば未だに本を扱うイメージが先行しているが、博物館や美術館などの資料との接続や、ICT 活用も推進していく使命がある。そこに地域や団体の情報も提供していくことができれば、生徒の探究活動に大いに寄与することができる。全員にこれを使いなさいと言うのではなく、こんな方法もあるよ、と背中を押せる存在こそが図書館の役割なのではないか。最初は誘導するのもよい。そこから生徒が何をつかみ取るか、そこを見逃さないようにすることが大切だ。生徒が主体的に活動する中でいかに自身の変容を自覚していくか、その過程に価値がある考える。そしてそのためには教師もその変容を見逃さないように丁寧に見取ることが求められる。目に見えないその価値をいかに捉えるか、どうやって伴走するか、いまの私の一番の課題である。

先日他校と合同で哲学対話を行う機会があり、5 名の生徒とともに参加した。終了後、「楽しかった」「またやりたい」と会話が弾み、生徒からはとても満ち足りた表情が見られた。総合の時間でもこんな顔が見たい。特に心に残った感想に、「普段あまり自分の話をじっくり聞いてもらう機会がないので嬉しかった」というものがある。哲学対話は答えを出すために行うものではない。より深く考え、もやもやすればするほどよいという。ここに、探究のヒントが隠されているような気がした。

この2年間、自分では気付けなかった学びが多くあった。グループセッションなどで私の拙い話を十二分に理解して広げてくださった大学院の先生方、院生の皆さまには本当に感謝しかない。理論と実践の往還とはよくいったもので、理論では分かったつもりになっていても、実践ではそうはいかない。そしてまた実践のその価値を理論が教えてくれる。先日

読んだ探究について書かれた本に、大学院で学んで感じたことが至極簡潔にまとめられていた。一瞬、私の2年間は何だったのかとショックを受けたが、おそらく大学院での学びがなければ、真の意味では理解できなかったであろう。ただ文字通りに受け止めるだけであったに違いない。学びに終わりはない。これから実践と省察を意識していきたい。

福井の学びを経験し、私学で教育(学び)をひらく

学校改革マネジメントコース 2024 年度修了生

石川 秀和

学位記伝達式で自身の名前が読み上げられ、少しホッとした気持ちになりました。教職大学院に学び、最も大切な財産となったのは、学び手の意識を再確認できたことです。法政で何度も卒業式は経験していますし、日々の課題提出などは数え切れないほどこれまで生徒に課してきました。その一つ一つに生徒がどのような気持ちを抱いていたのか、理解しているつもりになっていた自分の存在に気づかされました。自分自身のこれからの実践は、より生徒の見とりを意識したものにチャレンジできるのではないかと考えています。長期実践をまとめる中で、マネジメントをしながら様々なメンバーと繋がり、実践コミュニティを継続していくにあたって求められるものを学ぶことが出来ました。また、東京サテライトラウンドテーブルのコアメンバーを担わせていただくことで、リーダーシップやフォロアーシップについても学ぶことができました。真のリーダーにはどのような立ち振る舞いが求められるのか、メンバーに対してはどういったフォローが必要なのか、様々なトラブルを経験する中で気づくことができました。様々な「観」の違いがあっても目の前の生徒の見とりから対話と傾聴に取り組むことができれば、多くの大人と繋がるのが可能となるということについて

も学ぶことができました。今後は、自身の立ち位置に求められていることを自覚し、メンバーにとって更に学びがいのある、学びのコミュニティづくりに挑んでいきたいと思います。

この2年間、授業をひらく取り組みや新たなスタイルの研修に取り組み、その価値を広く職場に知らせることに努めてきました。授業をひらいた人たちの間でその価値に気づくことは実現できました。短時間でも「省察」を通して、授業の意味や価値をしっかりと吟味することの豊かさや必要性を学び合うことにつながりました。しかしながら、実践の価値を多くの同僚と共有し、大きなムーブメントにつなげるまでには到っていません。遠回りながらも地道な実践を積み上げていかなければならない限りにおいては、継続的な学び合いの文化は醸成されないということに気づかされました。授業を「ひらく」取り組みの価値を共有し、実践する時間的なゆとりをどのように構築していくのか、生半可なことでは実現できない課題に直面することとなりました。この課題は、今の法政にとっては非常に難しい課題であると認識しています。まずは、週に30分でも「カタリ場」に取り組み、クラス開きや保護者対応、思春期についての学習など時期に応じてテーマを設定し継続的に実践を積み上

げていきたいと思います。附属義務教育学校の「実践研」のように、その時々生徒に関する話題を本音で交流するなど、ファシリテーターを位置づけ、タイムマネジメントを工夫して取り組めればと考えます。お互いが実践していること、授業で大切にしていることを知るところから始めていく必要があるように思います。その際は、生徒のことが多く語られるような場を構築していきたいと考えます。また、若手の人が学びがいのある場だと感じる取り組みにつなげていきたいという展望を抱いています。

近隣の私学の教員からいただいたメッセージに「学校は今後、様々な面で社会に開かれたカリキュラム、働き方改革の側面からアウトソーシングが進んでいくと思われます。その中であって、「授業」だけはアウトソーシングをすることはできませんので、授業力が学校のブランディングに繋がって行くのではと考えています」というものがあり、私学において

も共感をいただいています。同じ日本の公教育を担っている点では公立学校も私立学校も共通の点が多くあります。福井の方々との繋がりを大切にして、ワクワクするような実践につなげていきたいと思います。

再出発のカンファレンスで柳澤先生から「リフレクティブに省察する民主主義はアメリカにおいては取り組めていない」という趣旨の厳しい現状についてのコメントがありました。自分たちの実践と向き合い、学びをひらいていくことは、簡単な課題ではないと思います。「研修は、明るく、楽しく、元気が出るように企画・運営する」ということをモットーに授業をひらく取り組みを地道に展開し、「子どもの姿を」多くのメンバーと対話し、未来を切り拓いていきたいと思います。これまでお世話になった皆様、本当にありがとうございました。

対話と省察の2年間

学校改革マネジメントコース 2024 年度修了生

川田 奈津子

立ち止まって考えると、教育に携わってから多くの人と対話をしている。一番は子ども達である。授業の中で子ども達の想定外の問いかけに一瞬戸惑いながらも問い返す。その問いかけにしばらく沈黙の後、子どもは笑顔で語り始める。その沈黙が私は好きだ。きっと彼らの頭の中は幼いながらもそれまでの経験や知識を総動員して問いかけに答えようとしている。時には別の子どもが割り込んできたり、子ども同士のやりとりに変化したりする。また、トラブルがあるとその時の状況や気持ちを聞きながらどうすればよかったのかを共に考え、子どもの言葉で表現できるように支援する。

第二は同僚である。同じ学校、同じ学年、同じ校務グループ、同じ分掌など、同僚と言っても実に広い。だから私の同僚はたくさんいる。一番よく話をして

いるのはやはり、同じ学年である。授業や児童指導が中心だが、話題が逸れて、それぞれの背景が見えてくると世代の違い、価値観の違いに出会う。実は、それは、授業や児童指導におけるの違いにつながっている。つまり、語りの中にはその人のさまざまな観が育っていて、言動に現れているのだろう。少し俯瞰的に捉える自分はどう考えるのかと自分に問いかけることもあった。たくさんのアイデアをもち、エネルギーをもっている同僚と共に生き生きと活動していくためには、私はどうしたらよいのだろうか、いつも自分に問いかけていた。

第三は保護者である。多様な背景を持つ保護者と対話をする。定期的な個人面談だけでなく、欠席やトラブルについての連絡など保護者と話す機会は多い。また、PTAの活動として学校を支えている存在でもあ

る。保護者の話を聞くと子ども達の家庭での様子やその様子を見ている保護者の価値観が見えてくる。「規則正しい生活」「子どもの話をきちんと聞く」など、正しいとわかっていても、それができない状況や、その状況を作り出している背景がある。学校公開や授業参観で何度も後ろを振り返り親が来ているかを確認していたり、親の表情を見ながら挙手したりする子ども達を見ると、子ども達にとって保護者の存在はとても大きいものであると感じる。だからこそ保護者との対話も大切にしたいと思う。

教職大学院での2年間はカンファレンスやラウンドテーブルを通して、多くの先生方と対話をした。多様な校種や役職を越えてそれぞれの先生方が語る実践の中にはたくさんの思いが詰まっていた。その思いを聞きながら自分の実践とつなげると校種や役職の違いを不思議と感じることはなかった。また、地域やシステムの違いも感じることはなかった。その先生方との交流を通して、思い浮かんでいたのは、前述の子どもや同僚、保護者などの様々な対話の場面だった。と、同時に、その時私が相手に問いかけたことやその時の相手の表情や反応も浮かんでいた。

院生の授業実践を聞くと、自分の授業を振り返る。あの時、具体的に問いかければもっと子どもの言葉を引き出せたのではないかと、いや、具体的に問いかけたことによって子どもの学びの枠を作ってしまった

のではないかと考えた。その後、明日の授業の主発問はどうしようかと考えていた。また、同僚性を高める実践を聞くと、話しているようで話せていない自分の職場を思い浮かべる。自分は職場でどんな話したいのかを考える。その後、明日学校に行ったら問題になっていた件についてもう一度隣の教師の話を聞いてみようかと考えていた。省察を次につなげようとする自分がいることに気がついた。

教職大学院で学ぶ多くの方が対話の必要性を感じ、勤務する学校でカンファレンスやラウンドテーブルといった対話の場をつくらうとしていた。私も限られた時間や空間の中で「何を」「どのように」変えることができるのだろうか模索していた。模索しながらも思い浮かぶ様々な場面にふと、変える前に自分が変わらなければならないのではないかという気付きもあった。反面、自分の教師としての道筋や考え方を肯定的に受け止めることもできた。この学びは私にとって、これからつながるとも大きな学びになった。この学びを今後の様々な場面につなげていきたいと考える。

東京サテライトは関東に住む私にとって福井の学びができるありがたい場所だった。先生方や一緒に学ぶ仲間と共に充実した2年間を過ごすことができたことに感謝している。ありがとうございました。

教職大学院での出会いを大切に

学校改革マネジメントコース 2024 年度(1 年履修)修了生

齋藤 英市

教職大学院での一番の収穫は、たくさんの方と出会って、いろんな思いや実践を学ぶことができたことだ。一年履修だった私にとっても価値ある時間だったのだから、2年間学んだ方たちは、私の2倍、いやそれ以上の思いを抱いているに違いない。毎月の合同カンファレンスや、夏や冬の集中講座、ラウンドテーブルなどで多くのことを学んだ。また、教職大学

院の先生方には、何回も学校に来ていただいた。そして、本校の研究の深まりのために様々なご意見をいただいた。また、見取りについてのレクチャーもしていただき、子どもの学ぶ姿で授業について語る研究会の在り方を構築していこうと教職員のベクトルをそろえ、次年度に向けて歩み出すことができた。

このような1年間は、実に学びのある日々だった。その学びを3点、自らの長期実践研究報告の中でも、以下のように記しているので紹介する。

1. 語ることの大切さ

カンファレンスなどでは、グループセッションを幾度となく行ってきた。いろんな方とたくさん語り合うことができた。その語り合いの中で、ハッとさせられることもあるし、そんな考え方もあるんだなあ、と納得してしまうこともあった。いろんな方とつながりながら、自分の実践を振り返り、思いを語り合えることは、自分が今思っている当たり前のことが当たり前ではないことに気づいたり、「ああ、やっぱり自分の考えていることはよかったんだな」と思ったりすることもある。様々な気づきがあった。こういったことは、本当に参加しないと得られないことだと思う。

2. 人との出会いが人を成長させる

1. と似ているが、校種も出身県も違う方々と出会える機会はこの教職大学院だけだ。いろんな方との出会いは、自分自身の幅を広げてくれる。一つの出会いが新たな出会いにつながっていく。こうやっていろんな方とつながっていくことができたことは、私の宝物だ。

3. 長期視点で見ることの大切さ

私たちは、ついつい1時間1時間の授業のある場面だけで子どもたちの姿を切り取り、見てしまいがちである。だけど、大切なのはもっと大きなスパンの中で位置づけて、子どもたちの姿を見ていくことが大切なのだなあ、と感じている。

この教職大学院での時間が、これまでの私自身の歩みを振り返るにいい機会になったことは間違いない。今の私の原点はどこにあるのか、なぜ今の私はそれを大切にしているのか。それらを見つめ直すいい時間にもなった。そして、これからどうしていきたいのか、展望も持つことができた。これらのことは、慌ただしい日々の中では、決してじっくり振り返ることができない。有意義な時間を過ごせたと心から思う。できれば、もう一年、大学院で学びたかったな、と思っている。いろんな方ともっと出会い、語り合いたかったな、と。こうやって意義ある時間を過ごせただなあ、と思えるのは、共に語り合い、思いを共有することを通じて、そこに大切な価値を見出すことができたからだ。

これからも、ここで出会った全ての方々に感謝する心を忘れず、こうやって出会えたご縁やつながりを大切にして、日々新たな気持ちで、前進していきたいと思う。

1年間を振り返って

学校改革マネジメントコース 2024 年度(1 年履修)修了生

橘 慶成

振り返れば、あっという間の一年でした。おそらく、皆さんも同じ感想をお持ちなのだと思います。1年履修となる私は、入学する前の夏期集中講義からがこの教職大学院での学びのスタートになります。『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み、カン

ファレンスを行いながら、徐々に対話の重要性に気が付き始めました。自己理解と他者理解につながる対話環境は社会的に重要であり、私たちが目指す Well-being な環境そのものなのではないかと気付き始めたのが、その1年後でした。

21年前から校務を効率化しようとデジタルライゼーションに取り組み、その延長として、これからの教員の働き方改革や校務支援にDXを取り入れることがWell-beingにつながるのではないかと考えていました。そして、教職大学院に入学するまでは、自分がこれまで行ってきた実践をDXという形で更に進めることを目標とし、長期実践報告に取りかかろうと思っていました。近年、職場におけるデジタル環境が進むにつれ、自分でDXを進めていくことを強く求められる時代に突入しました。その変革のスピードに悩み苦しむ方は多く、教員も生徒もタブレットが故障したりすると授業に参加できなくなるような時代となりました。そこがスムーズにいかないと時間という焦りの元にストレスがたまることから、各自のスキル向上が大事という事も事実でした。しかし、デジタル時代といえどもコンピューターは文房具であり、人が人として成長するために必要な学びはこれだけではないという事に気付いたのです。その元となったのは月間カンファレンスでした。カンファレンスで対話を行う毎に、徐々に自分の考えに変化が始まりました。

本年度、福井県高等学校教育研究会美術部会の研究部長として、授業研究会に対話を取り入れることを提案して実行しました。長期実践報告書にも書きましたが、新採用の先生方を交え、とても良い感じの研修会を実施することができました。先日の理事会でも対話が話題となり、若い先生方からいろいろな話を聞くことができ、自分たちも良い学びにつながったという感想をいただき、大学院での学びを研修の現場に取り入れることができたことをうれしく感じました。

大学院のカンファレンスやラウンドテーブルにおいては、組み合わせの重要性についても知ることができました。これまで、校種や教科が同じというよう

な共通点が無いと話し合いにならないというバイアスが働き、ディスカッションをするイメージが強かったのですが、何も知らない相手に自分について理解してもらえよう話をすることで自己理解が深まり、非認知能力が育まれるのだということが対話の重要な要素という事が分かったのです。そのような自己理解を深めるためにも、長期実践報告書で省察を繰り返し将来への成長の糧とする今回の学びは、とても意義のあるものでした。そして、今回の修了は終わりではなくスタートなのだという事も理解できました。

さて、私は美術教師として、自己肯定感や他者理解を育むことは重要な事だと常に思いながら授業をしています。美術の授業で何が生徒のWell-beingにつながるかを考えていたところ、福井県教育委員会様より対話型芸術鑑賞のお話をいただき、先日、本校で対話型芸術鑑賞が実施されました。1980年代にニューヨーク近代美術館(MoMA)が発祥とされる対話型芸術鑑賞は、近年様々な分野で注目され、ベネッセアートサイト直島では2010年頃から取り入れ始めた対話手法のようです。対話という手法では、本校が取り入れている哲学対話(p4c)などもありますが、対話型芸術鑑賞もWell-beingを育む手法の一つとして大変魅力を感じました。興味がある方は、Youtubeにアップされている「ベネッセアートサイト直島 対話型鑑賞フォーラム Vol.2」を是非ご覧ください。今後は、教職大学院での学びを生かしつつ、福井県で対話型芸術鑑賞をベースとしたコミュニティーを作っていきたいと思います。

最後になりますが、お世話になりました教職大学院の先生方と院生のみなさまに、心より感謝申し上げます。またお会いできる日を楽しみにしつつ、その際も、何卒よろしくお願いいたします。

教職大学院の学びを終えて

学校改革マネジメントコース 2024 年度修了生

増田 善宏

「学べば学ぶほど、自分はどれだけ無知であるか思い知らされる。自分の無知に気づけば気づくほど、より、一層学びたくなる。」

(アルベルト・アインシュタイン)

令和5年度に事前履修を終えて、期待と不安を抱えながら令和6年4月6日に開講式を迎え、5回の合同カンファレンス、9日間の夏期集中講座、6日間の冬期集中講座、2回のラウンドテーブルに参加し、教員人生を振り返りながら長期実践研究報告をまとめ、教職大学院での学びを終えることができた。上のアインシュタインの言葉が、教職大学院での学びを終えての率直な感想である。

私に教職大学院で学ぶきっかけを与えていただいたのは、教職大学院の小林真由美先生である。令和4年11月の大野市定例教頭会で、小林先生から教職大学院の紹介があった。小林先生の話から教職大学院に対して興味をもったものの、日々の教頭業務の忙しさなどから教職大学院で学ぶことの難しさを感じ、入学を決意できなかった。しかし、教頭職になってから、教職員を指導・支援することが多くなり、校内を出て学ぶ機会が少なくなっていることに気づいた。また、本校の広瀬校長の助言や教職大学院で学んだ経験のある有終西小学校の長谷川校長からの「あなたなら教頭と教職大学院の両立はできるよ」と背中を押していただいたことで、入学を決意することができた。

教職大学院では、合同カンファレンスやラウンドテーブルにおいて、院生や若手・ミドルリーダーの先生、校長先生、教育委員会の行政職の方などと、互いの実践や悩みを聞き合うことができた。また、ファシリテーター役を務めてくださった教職大学院の経験豊富な先生方から多くのアドバイスをいただいた。その中で、自分自身の実践と重ね合わせながら聞く

ことをとおして、自分自身の実践を振り返り、捉え直すことで磨くことができた。

また、夏期集中講座で『コミュニティ・オブ・プラクティス』や『学習する組織』の理論書を読むことがあった。理論書を読んでいる時は、英文を和訳にしていることから独特の言い回しがあることや、難しい用語が並んでいることから、手ごわい敵を相手にして苦しみながら戦う感覚があった。しかし、長期実践研究報告で自分の実践をまとめる中で、自分自身の実践と理論書に書かれていることが突然つながりはじめた。自分の実践が価値のあるものであったことに気づかされるとともに、再度、理論書を読み直し、更に自分自身の実践を捉え直し、磨いていくことの必要性を実感した。

さらに、長期実践研究報告書を作成することで、教員人生における32年間の実践をじっくりと振り返ることができた。32年間の実践を振り返り、今後校長になった時に「子どもにとって、学ぶ楽しさを実感し、毎日行きたいと思える学校」「教職員にとって働きがいのある学校」づくりを目指したいと考える。「子どもにとって、毎日行きたいと思える学校」づくりでは、子どもに「自分の思いを受け入れてもらえる」「自分のしたいことを肯定してもらえる」など安心感や自己肯定感を育む人間関係づくりを、学校全体で取り組んでいきたい。また、子どもが自律した学習者になれるよう、子ども自らが考えをもち説明を行ったり、対話を通して学び合いを行ったりする授業づくりを推進していきたい。「教職員にとって働きがいのある学校づくり」では、私自身がサーバント・リーダーシップを発揮し、教職員一人一人のアイデアや主体的に行動する力を引き出すことができるよう、対話を通して互いに学び合う集団づくりを進めていき、教職員が相互に支え合い、学び合い、高め合う組織を構築していきたい。

今後も、日々の職務を通しての学びから、自分が無知であること気づき、真摯に学び続けていく覚悟である。教職大学院で学ぶことを勧めていただき、勤務においても配慮をしていただいた校長先生をはじめ

めとして、私自身の学びを支え、勇気づけてくれた教職大学院の先生方、教職大学院で共に学んだ先生方など、お世話になったすべての方々に感謝を申し上げます。



修了生に贈る言葉



出会いと学びへの感謝

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立武生高等学校 岩佐 帆花

修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。皆様と出会い、そして支えていただきながら、学び合えたことに感謝しています。

私にとってこの1年間は、新しい刺激の連続で、たくさんの方との関わりの中で自分が揺さぶられ、また、課題が浮き彫りになり悩み続ける日々でした。しかし、今までで一番充実していた1年間でした。

私は、教育学部卒ではなく教育に関する知識や理論がほぼないということに不安を抱きながら、院に入学しました。「ちゃんと答えなきゃ」「何か考えを出して話さなきゃ」という気持ちで臨んでいたカンファレンスは、いつも緊張していました。そんな中、修了生の方々が応援してくださるように話を聞いてくださったり、また、うまく言語化ができず語りに不安を感じていた私に、考えを引き出すような質問を投げかけてくださったりして、私自身のペースを尊重しながら、あたたかい言葉をかけて見守ってくださいました。また、修了生の方々は自身の悩みやわからない部分を取り上げ、悩んでいいんだよと語りや姿勢で示してくださいました。わからない・悩んでいると表現することがこわかった私は、それを臆することなくできる先輩方に、かっこよさや頼もしさを

感じていました。そして、モヤモヤに向き合うことで、わかっている気になっていたことの原点に立ち返る大切さにも気付かせてくださいました。今振り返って改めて考えると、先輩方は、本当にわからないと悩んでおられたときもあると思いますが、率先して「わからないということも良いんだよ」という姿勢を取られていたようにも感じました。それはM1の様子や私自身の性格を理解してそのように対話の場をつくってくださっていたのかもしれないと思いました。それらが意図されていなかったとしても、私の心は本当に軽くなりました。これらにとっても勇気付けられて、1年間楽しみながら学ぶことができたと考えています。本当に感謝申し上げます。

修了生からいただいた言葉のなかで、「間違ってるかもしれないという思いと、絶対に間違っていないという思いを両立してほしい」という言葉がとても刺さっています。この言葉は私だけに対してではなく、みんなに対してのものだとおっしゃられていましたが、私自身とても納得でき、大事にしたい言葉として深く残りました。この言葉をいただいたときは、自分が大事にすることを自覚しながら活動に取り組む中で、うまくいかず間違っているのかもしれないと不

安に思ってその修了生に相談していたときでした。その修了生は、「現場で生徒に対するときにも生徒のことを考えながら自分の信念を持ち、それは絶対に間違っていないと思いながら芯を持って接していく。でもそのなかで間違っているかもしれないと思いながら考えていくということが、矛盾しているが大事なことだと思う」と話されました。私自身、人から影響を受けやすく、自分の信じるものが揺さぶられることが多いですが、この言葉を胸に今後も様々な物事に向き合っていきたいと思いました。また、この言葉がなぜ自分に刺さったのか、どうして大事にしたと思うのかなど考え続けていきたいと思っています。

1年間でたくさんの言葉や概念に出会いました。最初の頃はよくわからなかったものも最近では自分の実践とつながる部分を捉えられるようになり、どこか腑に落ちる感覚を抱くことが増えました。しか

しそれは一人でできることではなく、たくさんの方々の言葉や示唆をいただき、考えたり語ったりすることを通してできるようになったのだと思います。いただいた言葉やともに考えてきたことなどを心に留め、今後の学びに向かっていきたいと思っています。

それらを振り返り、文章にしようとする、また自分と向き合うことになり、その中で自分の課題やこだわりが見えてきて、難しさ苦しさを感じます。修了生の皆様がそれらに向き合い、書き上げられた長期実践報告を読ませていただき、学びにつなげていきたいと思っています。

最後になりますが、修了生の皆様、1年間本当にありがとうございました。皆様との出会いに感謝し、ご縁とこれからの学びを大事にしていきたいと思っています。今後の皆様のご健康とご活躍をお祈りしております。

終わりのない学びの中に生まれる楽しさ

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

前川 真慶

今年度修了される院生の皆様、ご卒業おめでとうございます。今年是一段と寒暖差が激しく、体調を崩しやすい冬となったと思います。私は、「修了生に送る言葉」として、1年間の大学院生活で学んだことを伝えたいと思います。

私は、今年度教職大学院に入学し、早くも1年が経ちました。この1年間は、自分にとって毎日が非常に新鮮で楽しく、充実した1年にすることができたと感じています。私は、大学院に入って本格的に、特別支援教育というものに触れ、それに関する知識・技術の習得に励んできました。その中で、インターン先では、附属特別支援学校に行かせていただき、実際に色々な児童と関わりました。最初は、特別支援教育に対して、「どのようなものなのか」「何をすればいいのか」「自らの関わりや発言は適当であるのか」な

どの特別支援教育に関する疑問や自分の行動に関する疑問が多く、自分の行動に不安しかありませんでした。また、学部での学びや特別支援ゼミでの学びが非常に難しく、言葉として理解できても、それらを実践の中で生かすことができませんでした。さらに、大学院での学びでも、「見取りとは何か」「よりよい記録の書き方とは」「インターンと金曜カンファレンス、学部での学びにおいて自らのサイクルは生まれているのか」などの大学院で学んだ理論と実践に関する疑問が多く生まれました。そのため、最初の数か月は、分からないことが大半であり、毎日を何とかの大学で積み上げてきた知識で乗り越えるという日々が続いていました。

大学院入学から3か月が過ぎたあたりから、学部・大学院での知識が実践と結びつき、本当の意味で理

解できるようになり、インターンで児童との関わり方が向上したとを感じる場面がありました。具体的には、関わっている児童が急に活動に取り組めなくなった出来事がありました。数か月前の自分であれば、何とかしてその児童を活動に取り組めるように自分の理論を押し付けて、無理やり関わっていたと思います。しかし、私は、その児童に対して、一緒に座り、その児童の話をお聞きとする姿勢や行動をとることができました。私は何か深く考えていたわけではない、「児童のお話を聞きたい」と思い、自然と出た行動でした。この行動を記録の中で振り返ると、私は自然と児童の思いに寄り添い、汲み取ろうとしていたことが分かりました。私はこの時、自ら成長を感じると共に、今まで学んだ知識に自分なりの価値づけができた瞬間であったと感じました。しかしながら、私の学びや成長は、ここで終わりではありません。まだまだ、自分には学びきれていない、理解できていないことが存在しています。具体的には、他者にとって了解可能性が生まれる記録の書き方や学級経営と授業について、今よりの綿密な保幼小特の連携の実現のために必要なことなど挙げればきりがありません。大学院で良く述べられている「子どもと教師の学びは相似形」というように、教師自身も、子どもの見本として、子どもと同様に終わりのない学びを続けていく必要があります。また、私は、特別支援教育を学ぶ中で、一人一人の児童に合わせた最善の教育は存

在したとしても、教育全体を包括できるような最善の方法は存在しないという考えがあり、一人一人の最善な教育の実現のためには、教師は学び続ける必要があります。その過程には、色々な不安や葛藤、失敗を繰り返すと思います。しかし、それ以上に、成功した時、同僚や仲間との協働の中で生まれた達成感を得た時、子どもの成長を見られた時は、学び続ける教師にとって活力になると思います。私は、学び続け、ものが続けた先に、最高の楽しさや喜びが生まれると考えています。来年からも子どもに関わる存在として、常に学び続けたいと考えています。

修了生の皆様も来年からは、新たな職場や新たな同僚と関わることになると思います。その中で、私と同じような疑問や葛藤、失敗をしてしまう場面があると思います。しかし、「失敗なくして成功はない」という言葉があるように、常に学び続け、試行錯誤をした人のみが本当の意味で成功や喜びを生み出せると思います。終わりのない、答えのない教育というものに関わる仲間として、その中でしか生まれない楽しさを活動の活力として、これからの教員生活を頑張りたいと思います。

最後に 改めて今年度修了される院生に皆さま、ご卒業おめでとうございます。これからの、ご活躍をお祈り申し上げます。

流れる水は腐らない

ミドルリーダー養成コース1年/福井市至民中学校 北川 夏帆

修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。そして、お疲れ様でした。私はまだ1年しか経っていませんが、修了生の方々を含め、この福井大学教職大学院で皆様と語り合った1年を振り返ると、「ここに来てよかったな」とすでに感じております。そのくらい、深い学びが得られた有意義な1年でした。きっと修了生の皆様も、ここで何かを得て、新たな目標

や希望を胸に、次の場所へ進んで行かれるのだと思います。

「流れる水は腐らない」という諺をご存じでしょうか。水たまりの水や、容器の中に入っている水のようには、流れのない水は腐りやすい一方で、流れている水は、常に新しい水が入り、腐ることがない。このことから、「絶えず動いているものは、何かしらの進歩

があり、沈滞や腐敗などのよくないことが起こらない」ということを意味しています。

学校や教育現場は、変動や改革に対して保守的で、簡単に変えることはできないと言われることがあります。世間からは、それが時代錯誤であるように見られてしまうこともあります。私も教職大学院に通うまでは、教育に携わる様々な立場の人たちと出会えたとしても、机を囲んで話しているだけでは、教育や学校の何かを変えるなんて到底できないと思っていました。「教育の課題は膨大で、それに対して教師である私はあまりにも無力である。そんな私に何ができるだろう」、このような無力感や疑問を抱いていました。

しかし、教職大学院では「流れる水」のように、目の前の子どもたちのために、そしてこれからの教育のために、何ができるか、何が必要かを常に考え、模索しながらも歩みを止めない素敵な方々と出会うことができました。そして、対話を通して互いの実践や思いを伝え合い、議論を交わす中で、視野を広げたり、自分の実践を新たな視点から捉え直したりすることができました。これらのおかげで、私は自分の凝り固まった考えや見えていなかったものを明らかにすることができました。

この1年で得られたものは、これだけではありません。ある方がこのようなお言葉をくださいました。

「北川先生のやっていることは決して無意味なことではないですよ。生徒たちにもきっと伝わっていると思います」

このお言葉をきっかけに、私のよどんだ気持ちは少しずつ澄んでいったように思います。私にとって

教師としての研究・実践を行う原動力は子どもたちです。だから今までは「子どもたちのために」と思い、目の前の子どもたちのことを最優先に見てきました。しかし、同じ立場の「協力者」や「同志」とも言える人たちがたくさんいることを教職大学院で改めて知りました。自分を認めてくれる人や同じ目標をもって教育に尽力している人がいる。心強い味方に私は支えられていると実感することができました。だから、同じ「子どもを支える存在」として、どのように協働していくことができるのかということも含めて、来年度はさらに研究と実践を重ねていこうと今は考えています。

「流れる水のように、絶えず動き続ける」というのは、とても気力のいることだと思います。ずっと同じ場所にとどまっていた方が安心で、心地よいこともあります。新たな場所に行くと、自分のこれまでの価値観が揺らぎ、それを受け入れられなかったり、やるせない思いをしたりすることもあるでしょう。私は思いもよらず、4月から新たな学校で勤務することになり、異動を命じられた日から、このような不安とやるせない思いがずっと続いていました。しかし、今まで私が学んできたことが消えるわけでも、研究してきたことが途切れるわけでもありません。「これまで経験して学び得たことを、新たな環境でどのように生かせるのか試してみなさい」と、一つ上のステージへ背中を押してもらったと思うことにしました。

流れる水は腐らない。教師としてさらに成長していくために、そして、子どもたちと教育の未来のために、それぞれの新たな場所へ進んでいきましょう。ありがとうございました。

エージェンシーを育む場

学校改革マネジメントコースコース1年/岐阜県岐阜市立市橋小学校 加藤 敦子

年度当初の内報版で「2024 年度の教育キーワードは、教師エージェンシーと教師ウェルビーイング、学

校エージェンシーと学校ウェルビーイングになるかもしれません。変動する世界をよりよく変革してい

くために、互いにエージェンシーを育み合い、発揮し合っていきましょう」と福井大学大学院 教授 木村優先生が私たちに投げかけてくださった意味を、カンファレンスや集中講座などの対話を通して実感することができた。振り返ると、先輩方の実践や、その根底にある願いや考え等を拝聴したり、私の実践について新たな視点と切り口でご意見をくださったりしたおかげで、いつも自分の考えを再構築することができたと思う。また、先輩方の人間力の高さは、私を動かす原動力に繋がっていたのではないかとも思っている。

2月に行われた長期実践報告会では、加賀市立錦城小学校 校長 坂口 明美先生の『『エージェンシーを育む学校経営』授業改革を核とした学校改革を通して』の実践を拝聴した。

坂口先生は、教師になってから今日に至るまで、どのような壁に直面しても、学ぶことを止めず努力し続けてみえたことが、ひしひしと伝わってきた。たとえゼロからの状態であっても、同僚とよりよいものが生み出せるまでとことん対話を繰り返し、形になるまで妥協しなかった。その姿から坂口先生のたくましさと同僚を巻き込む人間力の高さを感じた。

また、この経験は、その後の教務主任、主幹教諭という立場や管理職になってからの学校運営において確かに生かされていた。特に、教職大学院で学んでみえた2年間は、校長として教師エージェンシーを積極的に進め、確実に学校エージェンシーに繋いでいた。

年度始めの職員会で、校長が学校経営ビジョンについて語るのには、私も当然聞いてきた。ただし、学校生活が始まるとそこに示された具体を忘れてしまったり、立ち返ったりする機会は少なく、各学年の主任や指導部長に経営は委ねられていくことがほとんどのような気がする。また、目指す児童像についての具体的な姿は話から理解できるが、目指す教師像について具体的に示されることはほとんどない。ところが、坂口先生は、学校の現状を基に示された学校経営ビジョンを教員に示して共有するだけでなく、そのような児童を育てるための教師像についても具体的

に示していた。さらに驚いたことは、目指す児童像の具現のため、自身で教員一人一人に働きかけてみえたことだ。例えば、若手生徒指導主事や若手研究主任にアドバイスをしたり、自身の願いを基に大切にしたいことを伝えたりして、若手教員が自発的に動けるまで見届けてみえた。私は研修主事として若手教員の研修会も担っているため若手教員のサポートをするが、人によって伴走の仕方は様々だ。自走できるようになればよいが、最後まで一緒にやらなければ終わらないこともあるし、自走するまでにとても時間がかかる場合もある。それなのに、この立場で若手教員を支え続けた坂口先生は、本当にすごいリーダーだと思うし、そんなリーダーの下で自分も働きたいと思った。このように、誰に対しても同じように精一杯向き合ってくくださる坂口先生だから、一緒によりよいものを目指そうとする意識の高い教員やコアな教員が増えたのは間違いないだろう。また、年度初めに目指す教師像も明確に示してくださっているので、何に向かって研修したらよいのかも分かり、教師エージェンシーも育まれていったのだろう。

そして今年度、坂口先生は、昨年度中にまいてきた種が芽を出し、成長するであろうことを期待して、大切な役割をコアなメンバーに委ねていた。これは、自分がいなくなった後も学校エージェンシーが育まれるような組織にしていこうという願いと決意の表れだと分かった。自分でやった方がよいと思うことも思い切って任せることで、リーダーとしての自覚が芽生え、エージェンシーの高まりが期待できるからだ。この思い切りは、時間をかけて信頼関係をつくってきたからこそできることだと思った。

この実践報告から、私は坂口先生のマネジメント力の高さは、人間力の高さだと思った。自分にはないものをたくさんもってみえる坂口先生は頼もしく、憧れる。しかし、なりたいと思ってもなれるものではないと分かっている。だから、坂口先生の生き様から自分ができることを見出し、私らしくエージェンシーを育んでいきたい。このように思えたのは、教職大学院での学び合いが確かにエージェンシーを育む場になっているからだ。

省察すること、語ることの意味

学校改革マネジメントコース1年/岐阜県羽島市立中央小学校 野倉 理志

本年度終了される院生の皆様、ご卒業おめでとうございます。皆様のこれからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

皆様におかれましては、修了に至るまでの数年の間に多くの方々との対話や、それをもとにした多くの省察を繰り返され、最後の執筆を終えられたことと思います。私は、恥ずかしながら本大学院生として進学するまで「省察」という言葉を知りませんでした。1年前4月の月間カンファレンスにおいて、皆様と語り合った際に使われていた言葉の中で、初めて認識したところです。

本大学院では、「省察」や「語り合い」といった言葉を多く耳にします。入学当初はこれらの言葉の重要性が分からず、参加するラカンファレンスの場においては、とにかく自分の実践を話しさえすればよいと考え話し続けたことを思い出します。皆様と1年間の貴重な語りを通して、本当の大切さを少しずつですが理解をしてきたところです。

今回の執筆を通して、一緒に語り合った皆様から学ばせていただいた内容や考えを語ることで、僭越ながら感謝の言葉とさせていただきます。

1 「語ること」

「語る」と「話す」について、言葉の重みを比べると、語ることのほうが意識的に重く感じます。それだけ話すことの内容が詰まっており、相手意識して話すからでしょう。実際に語るの意味を調べると「あるまとまった量の情報を、目的をもって、また順を追って相手に聞かせることを指す。」とあります。

前述に述べた通り、入学当初の私は、自身の実践を聞き手の意識を考えず、話し倒して満足していました。改めて振り返ると、語るとは程遠い、レベルの低い対話をしていたと感じております。

しかし夏期の集中講座の頃から、私自身の意識に変化が起き始めてきました。皆様とカンファレンス

の中で話すことが楽しく感じてきたのです。職種、年齢も違う者同士ですが、同じテーマで語り、思いを知り、語り合う営みを通すことで、自身の次の実践や姿を明確にし、明日への一步を踏むことができる機会になりました。

語り合うことは、自身のやる気や、自信の「火」を灯す「燃料」だと感じています。

2 「省察すること」

「省察」とは、「自分の言動などを振り返り良し悪しを検討すること」とあります。院生として学ぶからには、何か実践を残さねばと考えていた自分としては、自分を振り返ることの意味が全く理解できませんでした。

しかしながら、1年を通して「省察」の重要性をやっと分かってきたところです。現在、私は「自分はどうして教員に憧れたのか」「教師として何をしたいのか」を自身に問いかけ、教員人生のそれぞれのステージを省察しようと考えています。現在見えてきことは「職員を育てたい」「一緒に学校を作りたい」という夢が一貫してあることが分かってきました。

省察という営みは、一教員として、自身を振り返ることを通して、自身の存在意義を再確認し、内発的に教員としての生きる姿(主体性)を作るサイクルであると捉えています。

現在の教育界においては、人材の確保や、研修等の実践が急務と言われています。本大学院での学びを通して、本当に必要なのは「自身を見つめなおすこと」「仲間と語り合あうこと」の営みの場をつくることですが、現職教員を勇気づけ、新たな若手に希望をもたせることになるのではと考えます。

「語ること」「省察すること」は、成果が数値化できず、成果として表しにくい内容ではありますが、主体的に学ぶ教員や、強いチーム学校づくりにつながるキーワードと考えています。

本年度終了される皆様におかれましては、本大学院で学ばれた内容をもとに、さらなる極みへと躍進

されることと思います。私も皆様の後を追いつながら、更に勉学に励みたいと考えています。

修了生に贈る言葉

学校改革マネジメントコースコース1年/高浜町立内浦中学校 本田 順郁

本年度修了生のみなさま、おめでとうございます。ご自身の取組を長期実践報告にまとめられて修了に至り、充実感とともに安堵されていることと思います。これまで多くの修了生とお話をする機会を頂きました。各月の合同カンファレンスや夏期・冬期集中講座、2回のラウンドテーブルなどで多様な素晴らし

い取組を教えて頂いたり、私の拙い取組にご助言頂いたりと有意義な時間を過ごさせていただきました。それらによって自分自身の取組が深まり、次年度へ向けての展望を開くことができました。感謝申し上げます。皆様の姿を見習い、よりよい長期実践報告をまとめられるように精進していきます。

感謝

学校改革マネジメントコース1年/富山県高岡市立福岡小学校 山口 武敏

本年度で修了する先輩方、おめでとうございます。毎月の合同カンファレンスで直接お世話になった方はもちろん、顔を合わせることはなくても、皆さんのことを研究に取り組む同志と思っていました。

本連合教職大学院の代名詞と言える、「対話を通じた学び」。この学びのスタイルがここまで続いてきたのは、「対話を通して学び合う」というバトンがこの教職大学院に集う院生から院生へと繋がれてきたからだと感じます。わたしも、このバトンをしっかりと次のメンバーへとつないでいこうと思っています。

さて、先輩方にとって、この連合教職大学院での学びはいかがでしたか。大学時代の半分の修業期間で(中には1年間の方もいらっしゃるかと思います。)毎日キャンパスに通う生活とは違いましたが、この連合教職大学院での日々はみなさんにどのような影響がありましたか。「研究テーマを解決した」「テーマを解決する見通しをもつことができた」「テーマを解決する道筋がまだ立っていない」等、さまざまな思いをもたれているのではないかと推察します。

わたしたち院生の研究の場は、正に、「現場」です。自身の働きかけで現場が変容する楽しみがあると同時に、現場が変わらないことに己の無力感を味わうこともあります。わたしも、この1年間取り組んでみて、大学時代の単位認定試験と異なり、自分一人の思いやがんばりでなかなか事は進まないなど実感しています。年度末を迎えた今、本連合教職大学院にて毎月のように行われる合同カンファレンス「対話を通じた学び」は、院生同士が互いの研究テーマについて学び合うよい機会であると同時に、「あなたの研究を前に進めたいなら、現場での『対話』に努めよ」という、教職大学院の先生方からのメッセージではないかとも考えるようになりました。

わたしたちの学び、わたしたちの研究はこれからも続きます。ですから、この2年間でご自身の研究テーマが十分に解決していなくても、研究マインドさえ持ち続けていれば、チャレンジは続けられます。

僭越ながら、わたしのこの考えに賛同いただけるなら、引き続き、現場や自分の就業先において、「対

話」を通じて、ご自身の仕事や所属コミュニティの発展に取り組んでいただきたいと思います。先輩方につくるコミュニティが各地に広がり先輩方と関わった方に対話の精神が根付くことによって、わたした

ちの世界はきっとよりよいものになるとわたしは信じているからです。

先輩方のご健勝とますますのご活躍を祈念しております。大学院の修了、本当におめでとうございます。



退任にあたって



元連合教職開発研究科 客員教授 小嵐 恵子

高校の卒業時、もう大学では試験も勉強もないんだと安易に考えていました。それは大きな間違いで、試験もあったし、レポートや論文のための徹夜もありました。

大学卒業時にも、もう試験や勉強もないんだと思いました。これも大きな間違いで、多岐にわたる本を読むことになったし、書くこともますます多くなりました。とりわけ、子どもたちや同僚から学ぶことが多々ありました。

教員生活を終えた時には、やれやれ学ぶこと、学ぶべきことも終えたような気持ちになりました。しかし、教職大学院においても、やはり学ぶこと、学ぶべきことはますます多くなりました。他者と対話する中で、

そして自らの教師生活を省みる中で、自分が成長する要因を考え続けることができました。

そうした機会を与えてくださった全ての方々に、深く感謝する次第です。これからのことはまだ具体的ではありませんが、もうこれで学ぶこと、学ぶべきことが終わったとはさすがに思っていない。

日々、プラスアルファのものを生み出していきたいですし、日々の出来事から何らかの教訓を得るべきだと思っています。つまり、人はずっと学び続ける存在だと実感しています。

今後も皆様と共に、励んでいきたいと思っています。ありがとうございました。

教えることは聴くこと、学ぶことは話すこと

元連合教職開発研究科 客員教授 西川 満

小学1年生の孫が母親とともにやって来て、「将棋をしよう」と笑顔ではにかむ。相手の様子を見ながら一枚ずつゆっくり駒を並べ、「お願いします」と元気に頭を下げる。「それじゃ最初は、まねながら駒を進

めてごらん」と、ルールや駒の性能を説明しながら指し進める。少し慣れてくると、自分の思い付きをチャレンジし始める。やがて詰みの局面に差し掛かる。盤面を見たり相手の顔を見たりして、思い切って王の

頭に金を置く。「負けました」と私が頭を下げるとぱっと表情が明るくなり大きく息を吐く。感想戦で、「この手をよく思いついたね」「この構想が素晴らしいかったね」「ここはどうしてこう指したの」などと時間をかけて振り返る。「ありがとうございました」で片付けていると、「盤と駒が欲しいです」と静かに言い出す。息子たちが使っていたものを何とか探し出すと宝物のように持ち帰る。

皆様のおかげで、教職大学院の非常勤講師として11年間務めることができました。そしていろいろなことを考え学ばせて頂きました。三つの言葉を挙げて少し振り返ってみたいものです。

一つ目は、まず「教えようとしなくてください」と言われたことを思い出します。「教えることは聴くこと、学ぶことは話すこと」という言葉を大切にしてきました。火曜FDが年間30回ほどあり、理論書や中教審答申、研究紀要、院生の学校改革実践研究報告などを読み、話題提供者として語り、数人で話し合うというスタイルの研修を繰り返します。そして金曜カンファレンスや月間カンファレンス、夏と冬の集中などに臨みます。ここでは院生の実践報告を決してさげすまず教えようとせず、謙虚な気持ちで傾きながら丁寧に聴き取るのです。

二つ目は、「子どもを見取る」です。初めは正直私には違和感のある言葉でした。工場で規格に合った製品を作るがごとく、学校で教師が必要と思われることを流れ作業で教え詰め込み、学力を付けるという考え方はあります。しかし、子どもはみんな同じではありません。性格も体格も興味の対象も、家庭や所属する地域社会も、それまでの学習歴も目指す進路も違います。子どもにも、一人一人に学習観・世界観があり人生観があるのです。もちろん基本的人権も尊重されねばなりません。そういう認識を持ちながら、その子の世界の中に入っていった一緒に学ぶ、という感触が子どもを見取ることなのでしょう。

三つ目として、「平等に対話する」ことを大切にしているラウンドテーブルです。これは大きな可能性を持つ素晴らしい実践だと納得しました。児童生徒も、偉い学者も教員も、保護者や地域の人も、外国の方も、誰でも丸く腰かけて相手に敬意を込めながら意見交換を図り、他者の世界観の一部を自分のそれとうまく融合させ、新たな大きな世界観を持てるように学び合う。120分で4人が話題を提供する予定なら、一人分は30分で、報告は10分ぐらいで済ませ、コメント交換に20分回そうというのが大切です。ファシリテーターも貴重な時間を大切に扱います。最近何度かNITSのラウンドテーブル型の研修に参加しました。参加者の方々が、このマナーを守り主体的に対話に参加している様子に、探究型の中央研修はいいものだなあとうれしい驚きを感じました。雑談も終わり「メールアドレスの交換をされたら」とアドバイスしたところ、「ぜひに」となり「ファシリテーターも」と誘われびっくりしました。

このとき雑談に花が咲いた「御上先生」を続けて観ました。ドラマの筋書きには触れませんが、担任の「考えて」に応じてクラスで対話を繰り返し、一人一人の生徒が、クラス全体が変容していくさまに見応えがあります。「こんな時はこう考えるのが正しい」とは示しません。いえ、示せないのでしょうか。一人一人の人生があり、それぞれ自分の世界観を持っています。そして、どの生徒の世界にも通用する「究極の解」は存在しないと思われます。だから「教えようとしなくて」「子どもを見取る」「平等に対話する」ことを心がけているように思えます。私もようやく、孫に冒頭の一コマのように接することができるようになりました。孫とのひとときを大切にしながら楽しく生きていきたいものだと思います。

最後になりましたが、福井大学教職大学院の今後なお一層のご発展と、皆様方のますますのご健勝・ご活躍をお祈り申し上げ、退任の挨拶に代えさせていただきます。誠にありがとうございました。

新たな教師の学びと探究的な学びへの挑戦

元連合教職開発研究科 准教授 森田 史生

3年間大変お世話になりました。これまで附属中学校研究主任時に初の研究実践者教員として、教育総合研究所教員研修課長時に共同研究員として客員スタッフを経験し、今回で3回目の教職大学院スタッフとして務めさせていただきました。今回の専任教員としての3年間（R4～6年度）は、コロナ感染症が落ち着き始め、学校現場では自粛していた各種活動が解禁になるとともに、教員の働き方改革のより一層の推進、免許状更新講習の廃止など、教育や学校、教員の取り巻く環境が大きく変動してきた期間でした。この中で、専任教員として関わったことは、教職大学院の学びの意義を再確認するとともに、「新たな教師の学び」を展開していくことを掴むことができたと感じています。この3年間の取り組みを紹介させていただきます。

1. 「新たな教師の学び」への挑戦

① 研修観の転換を促す新たな教員研修のデザイン

R4年度に免許状更新講習が発展的に解消され、それに伴い新たな研修である「中堅教諭等資質向上・40代・50代」を県教委・研究所との共催研修として立ち上げました。更新講習の3日間をベースに2日間の研修を新たにデザインし、「これからの教育、三つの種、実践記録を読み解く、自分の実践を省察し新たな展望を拓く」の4サイクルで構成され、年代・校種・地域を混ぜたホームグループ、年代別のコースグループ、新たなクロスグループによるカンファレンスを軸に、ファシリテーターは50代に担当してもらい、受講生が主体となる大学院の学びと同じサイクルを描いています。2日間の研修を経て、受講生の先生の何が変わっていくか見てみると、自分歩みを振り返り、実践を記録化して捉え直すことで、自分の大切にしていること、すなわち「観」を実感することにつながっていきます。そして、このよう研修の意義をつかむことで研修観の変容につながっています。

② 福井の研修サイクルを全国に広める

3年前の夏、NITS（教職員支援機構：全国の教員研修の中核）で柳澤先生、松木先生が講師の2日間の研修デザインセミナーからスタートしたNITSの研修改革。次年度から新たにNITS職員のマネジメントプログラム研修、1年～2年間のロングスパンの探究型コア研修（つくば参集・オンライン）、研修デザインを主とする全国マネジメントプログラム研修（オンライン）が一気に始まり、これらの全ての研修に福井大学から多数の先生にファシリテーターとして参加していただきました。これら探究型の研修は福井の研修サイクルを採り入れたもので、少人数のグループを軸に、実践を語る、教育資料を読み解く、自分自身の気づきを綴っていく多重のサイクルとなっています。福井大学の先生方は、ファシリテーターの役割を示すと共に、参加者がじっくりと話ができる場を創りながら、研修の中で参加者自身が気づき考えていくことを全面支援していただきました。

この福井モデルの研修は、初めて体験する全国の先生方には衝撃であったようで、特にNITS対面での3日間のコア研修では、インプットはほとんどなく、グループでの話し合いが主の展開に戸惑う様子の先生がほとんどでした。しかし、2日目後半になると、その話し合いと記録を綴る中で気づきが生まれ、一気に学びが広がり高まり深まっていくことに、参加者自身が実感していくのを感じとれました。

このNITSの取り組みは、ものすごいスピードで全国に広まっており、福井型研修サイクルへの転換が全国でうねりとなって、各地の研修改革と研修観の転換につながっています。このNITSの研修改革に連携協働できたことも大きな学びとなっています。

2. 福井の学びを世界に広げるエジプト教員研修

2年前の令和4年9月から再開されたエジプト教員研修。現在エジプトには55校のEJSが建設され、日本方式の教育システムを導入しています。研修テーマは「管理職」「特活」「授業研究」「幼児教育」

の4テーマ。1回あたり現役EJSの40人の先生が、福井大学で4週間の探究型研修に臨んでいきます。ここ3年間で11回の研修に携わり、440名のエジプトの先生と交流し、実際にエジプトに行ってEJSの取組みを見られたことは貴重な体験でした。この研修では附属義務、幼稚園の学びを4週間継続的に見取る中で、実践を語り、理論書を読み解き、記録を綴る大学院の学びのサイクルで展開されていきます。福井の学びが今世界の学びへとつながり、確実な成果をあげています。今後もエジプト教員研修は続いていくので、福井の学びが多くの教員研修改革につながっていくと感じています。

3. 実践を語り合う校内研修への挑戦

やはり大学院で一番好きなのは、月間カンファレンスなど院生の皆さんが熱く語っている場、ストレートマスターの金曜カンファレンスの場だったと感じています。そして、この3年間、担当校を始め多くの学校を訪問させていただきました。現職院生の先

生方は、大学院での学びを勤務校で生かそうと、学校の中核となって様々なことに挑戦されている姿を多く見てきました。その中でも、授業研究を校内研修の中心に据え、授業研究会だけでなく、校内の先生方が自分の実践を語る場を採り入れた校内研修に挑戦されていることにいつも刺激をもらっていました。

現在、教育観、授業観など「観」の転換の必要性が言われていますが、「観」の転換には自分自身はどんなことをしてきたのか(しているのか)、何を大切にしているのか、求めているものは何かなど自分自身を捉えないと転換も始まらないものです。

ぜひ、この学びを学校に広げ、先生方が自分自身で学び続けることの意義をつかんでいける校内研修をデザインしてほしいと思います。

最後に教職大学院の学びと学びのサイクルの中で多くの方々と一緒に過ごせたことは、自分の「観」を大きくバージョンアップにつながったと感じています。3年間本当にありがとうございました。

退職の挨拶

元連合教職開発研究科 講師 香山 太輝

この度の3月末日をもって、福井大学教職大学院を退職いたしました、香山太輝です。着任から1年での退職ということで、教職大学院の先生方、院生の皆様、事務職員の皆様には多大なるご迷惑、ご負担をかけてしまいますこと、大変申し訳なく思っております。

福井大学での1年は、大学教員として仕事を始めた最初の1年でしたが、不自由な思いをすることなく、素敵な出会いに恵まれ、本当に充実した日々でした。不慣れな私に福井大学での教育研究について共に創りながら教えてくださった先生方や、日々の仕事を支えてくださった事務職員の方々、そして、たくさんの気づきを与えてくださった院生の皆様にまず感謝申し上げます。

この一年間、私の方からは福井の皆様に何一つ貢献できませんでした。皆さんと一緒に過ごす中で、立ち止まって考えるべき課題をたくさんいただきました。ここでは、その一つを綴らせていただければと思います。

カンファレンスにおけるファシリテーターの役割を担うことが、福井大学教職大学院での最大の仕事といってもよいほどだったと思います。こうした環境に身を置くことができたことで、得られたことがありました。ファシリテーターという言葉は耳にしたことはありましたが、自分自身の身体をもってしてその役割を生きた経験はほとんどありませんでした。ですので、当然難しかった。しかし、難しかった、できなかった、というよりも、自分の真ん中の部分が

仕事に乗り切らない、どこか上滑りしているような感覚が強く残っています。

院生の皆さんの言葉に耳を傾けて、応答し、その場を何とか進めることはできる（これは私の力というよりも院生の皆さんの力によるところが大きいと思いますが）。それにも関わらず、自分が機械になったような感覚。その要因はおそらく、院生さんに返す私の言葉にありました。間違っただけではないけれど、その言葉は、自分でなくても返せたのではないかと思うような言葉ばかり。また、他の院生さんの言葉を受け取ったとしても返せてしまう言葉ばかり。こんな言葉しか返せないのならば、他でもない自分がこの仕事をする意味などどこにあるのか。ファシリテーターなど、AI にやらせてしまうほうが上手にできるのではないかと、自分の仕事の貧弱さを思い知りました。

この問題はおそらく、ファシリテーターという役割を全うできるか否かという範疇を超えて、私にとって重要な問題であるように思います。すなわち、教育学研究者として、教育実践と、あるいはそれに携わる方々とどのように向き合っていくかという問題に関わっていると思うのです。

私の専門とする教育史研究では、特定の時代の人々の教育的営為に注目し、その営為を、ある種の物

語として記述していくことを通して、自らのアイデアを表現していきます。私が私の経験を語るのではなく、他者の経験を語ることを通して、思いを届けようとしています。学校教育の仕事に例えるならば、教材を介して思いを届ける。一般的な大学の講義ならばこれができます。しかし、カンファレンスという場ではこれが出来ません。私はこれが非常に困りました。

生身の私として、直接的に院生の皆さんと向き合い、その場にいるメンバーどうしのやり取りの中でこそ生まれる固有の価値を発見し、それを生きた言葉で表現したい。立場を超えて、教育実践に携わる方々共に研究できるようになりたい。研究をするということを超えて、教育に関わる生活経験を分かち合いたい。こうした、論文執筆や講義とは別のモードでのコミュニケーションが取れるような自分になりたい。

私に足りないことは数えきれないほどあるのだと思います。福井大学での1年は、途方もない課題を私に与えてくれました。この経験はその意味で、大変貴重なものでありました。大きすぎる課題は、私にとって希望です。次の現場でも精進して参ります。

福井でご一緒させていただいた皆様に重ね重ね御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

感謝・感謝・感謝

元連合教職開発研究科 コーディネートリサーチャー 永谷 彰啓

現役を退いてから、非常勤講師の立場で、この教職大学院での教育に関する仕事に関わらせていただいていた感謝の気持ちでいっぱいです。しかも、最先端の教育理論や教育行政を学び、さまざまな教育実践を聞かせていただき、さらには海外の先生たちとも研修ができたこと、それぞれがとても充実した時間でした。教職大学院自体は、現職の時はそんなに身近な存在ではなかったのですが、退職してから、声をかけて

いただき、お世話になり、とても楽しく学ばせていただきました。

授業参観や授業研究ができたこともとてもありがたかったです。ストレートの院生や現役の先生方の授業を見せていただくことはとても楽しみなことでありました。子どもの見取りの重要性和同時に、子どもにそうさせている教師の思い、手立ての重要性も強く感じました。授業の中で、子どもの発言を受けて瞬時に判断し、分析して、授業をどう進めていくかが

とても大切であること、その判断力、分析力が授業力に大きく関わっているということを改めて感じました。

教職大学院の講師という立場で、授業も何回かさせてもらいました。附属小学校や中藤小学校、さらには学生さんを相手に「大造じいさんとガン」「やまなし」「山のいのち」などの国語の単元の授業をさせていただきました、子どもたちと一緒に読み進めていくことのおもしろさを改めて感じました。ある子の発言をきっかけに、みんなで考え合ったり、話し合ったりしていく中で、さらに深まっていくことができたときの感動、感激は授業のすばらしさを実感させてくれました。

毎月行われるカンファレンスで、いろんな先生方の実践を聞かせていただいたこともとても良かったです。4、5人のグループでじっくり時間をかけて、実践を聞いたり、みんなで話し合ったりする時間はとても貴重な時間でした。カンファレンスに参加して、現役の頃の学校にいかせたらよかったなあと思うようになりました。自分の思いを話し、それを受動的に聞いてもらい、新たな方向性を見出すことができるカンファレンス、こんな場がとても有意義だと思います。ぜひそれぞれの学校現場にいかしていただきたいと思います。

2月と6月に行われるラウンドテーブルでは、全国の先生方の実践を聞かせていただきとても刺激を

頂きました。欲を言えば、もっと地元の福井県の先生方にたくさん参加していただけるといいのにな、と願っています。

私がよく関わらせていただいた Zone C では、先生方以外の方の参加者も多く、その方たちとも話をし、新しいつながりができました。Zone C は持続可能なコミュニティが大きなテーマでした。学校の教員以外の、公民館の方、地域で頑張っておられる方、さらには高校生や大学生と一緒に、地域コミュニティの在り方について話し合いができました。

さらには、そば打ちを趣味としている私には、福井県のおいしい蕎麦をできるだけ多くの方に食べていただきたいという夢もありました。そのため、ラウンドテーブルやカンファレンスで一緒になった方に蕎麦の宣伝をして、よく蕎麦を送っていました。県内の先生方はもちろん、沖縄から北海道まで、全国の先生方に蕎麦を食べてもらえることができたのも、この教職大学院でのつながりのおかげです。「おいしい!!」と喜んでもらえて、とても嬉しかったです。今後も蕎麦に関する仕事は、身体の動く限り頑張っていきたいと思っています。

多くの先生方や民間の方々と関わらせていただき、教育や授業について語り合い、蕎麦を楽しんでいただき、本当に充実した時間でした。ありがとうございました。



令和7年度年間計画

※記載の内容は変更になることもございます。

2025年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 学校・院生配布版				2025.3.25現在			
4	1 火			1 木	週間カンファレンス		1 日
	2 水			2 金	憲法記念日		2 月
	3 木			3 土	みどりの日		3 火
	4 金	週間カンファレンス 12:50- (授業研究・教職専門性開発コース)		4 日	こどもの日		4 水
	5 土	開講式 13:00-15:30 オンライン会場: 福井の東京 オンライン: Zoom 福井の岐阜 特別支援教育ゼミ ガイダンス		5 月	振替休日		5 木
	6 日	入学式(参加は任意)		6 火	火曜授業		6 金
	7 月			7 水	週間カンファレンス		7 土
	8 火			8 木	運営協議会(オンライン)		8 日
	9 水			9 金	週間カンファレンス		9 月
	10 木			10 土	週間カンファレンス		10 火
	11 金	週間カンファレンス		11 日			11 水
	12 土			12 月			12 木
	13 日			13 火	週間カンファレンス		13 金
	14 月			14 水	月間合同カンファレンスA 8:30-14:00 オンライン会場: 福井 奈良 オンライン: Zoom 特支ゼミ 15:00-17:00		14 土
	15 火	4系授業開始(4系免P1年次除く) 13:00-16:45		15 木			15 日
	16 水			16 金	週間カンファレンス		16 月
	17 木			17 土	月間合同カンファレンスA 8:30-14:00 オンライン会場: 福井 奈良 オンライン: Zoom 特支ゼミ 15:00-17:00		17 火
	18 金	週間カンファレンス		18 日			18 水
	19 土	月間合同カンファレンスA 9:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom		19 月			19 木
	20 日			20 火			20 金
	21 月			21 水			21 土
	22 火			22 木			22 日
	23 水			23 金	週間カンファレンス		23 月
	24 木			24 土	月間カンファレンス東京サテライト 大学祭		24 火
	25 金	週間カンファレンス		25 日			25 水
	26 土	月間合同カンファレンスB 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom		26 月			26 木
	27 日			27 火			27 金
	28 月			28 水			28 土
	29 火	昭和の日		29 木			29 日
	30 水			30 金	週間カンファレンス		30 月
				31 土	月間合同カンファレンスB 8:30-14:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	授業予備日	

7	1 火			1 金			1 月
	2 水			2 土	※それぞれaかbいずれか一方に出席 夏期集中講座Cycle2a* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 岐阜 奈良 オンライン: Zoom	中堅研修 第Ⅲ期	2 火
	3 木			3 日			3 水
	4 金	週間カンファレンス		4 月	夏期集中講座Cycle2b* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	中堅研修 第Ⅲ期	4 木
	5 土	シンポジウム		5 火	7日: オープンキャンパス		5 金
	6 日	ラウンドテーブル 8:30-14:00		6 水	夏期集中講座Cycle3a* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom		6 土
	7 月			7 木			7 日
	8 火			8 金			8 月
	9 水			9 土			9 火
	10 木			10 日			10 水
	11 金	週間カンファレンス		11 月			11 木
	12 土	月間合同カンファレンスA 8:30-14:00 オンライン会場: 福井・小浜 オンライン: Zoom 特支ゼミ 15:00-17:00		12 火			12 金
	13 日			13 水	※13~15休業		13 土
	14 月			14 木			14 日
	15 火			15 金			15 月
	16 水			16 土			16 火
	17 木			17 日	特支ゼミ9:00-16:00		17 水
	18 金	事前履修オンライン説明会 週間カンファレンス		18 月	夏期集中講座Cycle3b* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 岐阜 オンライン: Zoom	学生募集説明会(予定) 岐阜RT(予定)	18 木
	19 土	月間合同カンファレンスB 8:30-14:00	授業予備日	19 火			19 金
	20 日			20 水			20 土
	21 月	海の日		21 木			21 日
	22 火			22 金			22 月
	23 水			23 土			23 火
	24 木			24 日			24 水
	25 金			25 月			25 木
	26 土	※それぞれaかbいずれか一方に出席 夏期集中講座Cycle1a* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 東京 岐阜 オンライン: Zoom		26 火			26 金
	27 日			27 水			27 土
	28 月			28 木			28 日
	29 火	夏期集中講座Cycle1b* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom		29 金			29 月
	30 水			30 土			30 火
	31 木			31 日			

10	1 水	後期授業開始		11	1 土		特設ゼミ 公開研究発表	12	1 月		
	2 木				2 日				2 火		
	3 金	週間カンファレンス			3 月	文化の日			3 水		
	4 土				4 火		月曜授業		4 木		
	5 日				5 水				5 金	週間カンファレンス	
	6 月				6 木				6 土	特設ゼミ 9:30-16:00	
	7 火	4系授業			7 金	週間カンファレンス			7 日		
	8 水				8 土	第2回推薦入試			8 月		
	9 木				9 日				9 火		
	10 金	週間カンファレンス			10 月				10 水		
	11 土				11 火				11 木		
	12 日				12 水				12 金	週間カンファレンス	
	13 月	スポーツの日			13 木				13 土		
	14 火				14 金	週間カンファレンス			14 日		
	15 水		月曜授業		15 土				15 月		
	16 木				16 日				16 火		
	17 金	週間カンファレンス			17 月				17 水		
	18 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-) 特設ゼミ 15:00-17:00			18 火	週間カンファレンス			18 木		
	19 日				19 水				19 金	週間カンファレンス	
	20 月				20 木				20 土		授業予備日
	21 火				21 金	推薦入試第2回合格発表 週間カンファレンス			21 日		
	22 水	第2回推薦入試出願受付開始			22 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンサイト会場:福井 小浜 オンライン:Zoom 東京サテライトRT			22 月		
	23 木				23 日	勤労感謝の日			23 火		
	24 金	週間カンファレンス			24 月	振替休日	授業予備日		24 水		
	25 土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00 オンサイト会場:福井・東京 オンライン:Zoom			25 火				25 木		中堅研修 第1期
	26 日				26 水		月曜授業		26 金	冬期集中講座a 9:30-17:00 オンサイト会場:福井・岐阜・東京(12/26-28) オンライン:Zoom	中堅研修 第2期
	27 月				27 木				27 土		
	28 火				28 金	週間カンファレンス	公開研究発表会		28 日		
	29 水				29 土	月間合同カンファレンスB 文京 9:30-14:00 (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-)			29 月		
	30 木				30 日	入試説明会			30 火		
	31 金	週間カンファレンス							31 水		

1	1 木			2	1 日			3	1 日	特設ゼミ 13:00-16:00	
	2 金				2 月				2 月		
	3 土				3 火				3 火		
	4 日	冬期集中講座b 長期実践研究報告の作成 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom			4 水				4 水		
	5 月				5 木				5 木		
	6 火		4系授業		6 金				6 金		
	7 水				7 土	第1回入試			7 土		
	8 木				8 日	長期実践研究報告会 9:30-12:30			8 日		
	9 金	週間カンファレンス			9 月	第2回入試出願受付開始			9 月		
	10 土	予備日 長期実践研究報告の作成 (予備日)(9:30-17:00)			10 火				10 火	運営協議会(オンライン)	
	11 日				11 水	建国記念の日			11 水		入試準備
	12 月	成人の日			12 木				12 木	学部個別試験(後期)	
	13 火				13 金				13 金	第2回一般入試合格発表	
	14 水				14 土				14 土		
	15 木				15 日				15 日		
	16 金	週間カンファレンス	入試準備 信州RT		16 月				16 月		
	17 土	大学入学共通テスト			17 火				17 火		
	18 日	大学入学共通テスト 第1回入試出願受付開始			18 水	第1回一般入試合格発表			18 水		
	19 月				19 木				19 木		
	20 火				20 金				20 金	春分の日	
	21 水				21 土	シンポジウム			21 土		
	22 木				22 日	ラウンドテーブル 9:30-14:00			22 日		
	23 金	週間カンファレンス			23 月	天皇誕生日			23 月	学位記授与式10:00-12:00 (参加は任意)	
	24 土				24 火		入試準備		24 火	学位記授与式 18:00-20:00	
	25 日				25 水	学部個別試験(前期)			25 水	インターンシップ説明会	
	26 月				26 木				26 木		
	27 火				27 金				27 金		
	28 水				28 土	第2回入試			28 土		
	29 木		授業予備日						29 日		
	30 金	週間カンファレンス(予備)							30 月		
	31 土	長期実践研究報告締め切り	岐阜RT(予備)						31 火		

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】

2025 年度が始まりました。3 月に 58 名の院生が無事に修了され、4 月には 63 名を迎えることになりました。今年度の Newsletter も院生の寄稿だけでなく、読者の皆様の寄稿もいただきながら、多くの協働の下で発行をしていけたらと考えております。本教職大学院も皆様と共に学びを深めていく協働探究の歩みを大切にしていけたらと思います。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。
(2025 年度 Newsletter 担当一同)

教職大学院 Newsletter **No.193**

2025.4.11 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院
福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp